白と黒の色彩からみる日韓文化と社会
―言語と観念の色を中心に―

金　　泰　虎

キーワード：五行説、色彩、色相、白、黒、白黒、黒白

はじめに

本稿は、日韓の白と黒が言葉や日常生活の中で、いかに使われ、この白と黒の色彩観念が意識や行動として、どのように現れてくるのか、前近代の五行説と近代国民国家成立後の西洋の色彩概念を踏まえつつ、実際と観念の色彩という観点に立って日韓社会の在り方を追究するのが、その目的である。

従来、日韓では白と黒のビジュアル（Visual）、または観念に基づく色彩に関する日韓比較や対照研究は行ってきていないに等しい[(1)]。そこで、白と黒、あるいは黒と白という色彩の表記順であるが、日本では「白黒」、韓国では「黒白」とするのが一般的である。以下では、白と黒、「白黒」という用語で記す。

日韓社会における白と黒の色彩概念や観念を追究する前提として、時系列の中で前近代、近代国民国家成立期に大別しつつ、グローバル（Global）化時代という時期も念頭に入れて論を進める。というのは、時系列に基づいて鑑みると、白と黒が日韓社会に受容された過程や経緯が明確にされ、かつ様々な場面で白と黒の色彩が用いられる際、いかなる意味を持ち、どんな役割を果たしているのかの追究がしやすくなる。

前近代の日韓では、社会の全般に亘って五行説の色彩概念が強く影響を与えており[(2)]、とりわけ白と黒の色彩も例外ではない。近代国民国家成立以降は、従来の五行説に西洋から色彩概念や観念が伝わり、そこから今や西洋の色彩概念と観念が日韓社会の全般に広がってきている。つまり、前近代の日韓社会では、五行説の色彩概念と観念が言語を含む生活の全般に影響を及ぼしていたが、近代国民国家成立後は五行説より西洋からの色彩概念と観念が日常生活のビジュアルな色彩、引いては観念の色彩に至るまで大きな影響を与えているのである。例えば、日韓の結婚式と葬式におけるビジュアルな白と黒は、西洋の色彩感覚が大きく影響しているが、これに関しては稿を改めて論ずることにする。

そこで、本稿では日韓の白と黒という色彩を中心に時系列に基づきつつ、五行説と西洋の色彩概念や観念を踏まえ、白と黒が言語、ひいては意識及び行動に、いかに現れるのかの考察を行い、日韓社会の在り方を位置付けたい。

1．日韓における五行説の色彩

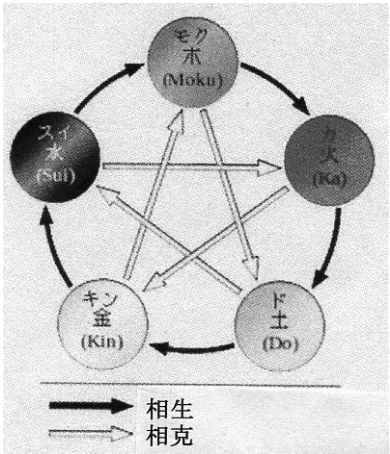
日韓社会の言葉と日常生活における白と黒に関する色彩の実際と観念の分析をするためには、まず五行説について多少の理解を深める必要があろう。

五行説は、中国の戦国時代に発生して理論付けられたものであり[(3)]、万物は木･火･土･金・水の５元素でなっているという考え方である。これらの元素は相生、相克に基づいて成り立っており、その関係を占う理屈である。

（図１）で見るように、万物は５元素の循環構造である。相生の順は、木･火･土･金･水、相克の順は木・土・水・火・金、そして生成の順は水・火・木・金・土である。例えば、「木生火」は木が火を産むという意味で、５元素が循環のサイクル（Cycle）のように続いている[(4)]。

日韓では、伝統的に子供の命名をする際も五行説の理論を取り入れ、特に韓国では一族、つまり門中の人々の命名に五行説に基づく「行列字」という文字を用いる[(5)]。

（図１）五行説の５元素と相互関係



さらに、５元素には色彩も含まれており、それらは木（青／緑）・火（紅／朱／赤）・土（黄）・金（白）・水（黒／玄）である。この中で金や水は、（図１）で見るように、白と黒で示される２つの元素で相克ではなく相生である。つまり、対立や反対と言った意味合いではなく、両者は補強する元素なのである。

ところで、以下の（表１）でみるように、五行説では方向、五獣、季節、五味、五情、色彩などの万物について５元素で示す。特に、方角を表す五獣はビジュアルな５元素の色彩で描かれている。例えば、高句麗の古墳[(6)]、日本の古墳[(7)]の壁画には方角ごとに五行説の理論に基づく色彩の獣が配置されている。つまり、５元素の方角における五獣の色彩は、「木：東（青竜）」･「火：南（朱雀）」･「土：中央（黄麟）」･「金：西（白虎）」･「水：北（玄武）」である。

（表１）五行説の５元素と諸事

種類	木	火	土	金	水
方向	東	南	中	西	北
五獣	青竜	朱雀	黄麟	白虎	玄武
季節	春	夏	土用	秋	冬
五味	酸	苦	甘	辛	塩辛
五情	喜	楽	怨	怒	哀
色彩	青／緑	紅／朱／赤	黄	白	玄／黒

山本三千子は、五行説における白は「涼やかに澄み切り自然が地に返っていく終焉の色」、そして黒は「暗闇の中で静かに力を蓄え誕生を待つ色」と位置付けている[8]。白を終焉の色としているのは、前近代における葬式の色彩を意識したことであると考えられる。しかし、前近代には白い動物が神聖視され、白は神聖な色彩、なお清潔感とともに民衆の服色として受け入れられた親密さの強い色彩でもある。

韓国人の色彩意識を追究している박명원（パクミョンウォン）は、シャーマニズム（Shamanism）などの巫俗信仰までもが陰陽五行説に影響されているとしている[9]。確かに前近代の韓国に五行説が大きな影響を与えてはいたが、すべてが五行説の色彩概念に基づいているとは限らない。

朝鮮時代には多くの白服の禁制令が発せられていて[10]、例えば太宗元（1400）年「禁白色衣服」[11]が取り上げられる。その後も度々白色の服の着用を禁じていたが[12]、正祖17（1795）年10月には「亦係朝官之服、而公服之裏、既用青色、私室之中、必着白色（中略）先朝、亦嘗厳禁白衣」[13]とある。つまり、朝鮮（韓国）は中国側の東に位置しているため、東の方角を意味する色彩概念の青をもって服の色彩にしようとする。但し、権力側も妥協をし、公服としては青、そして家では白としている。これは五行説の色彩概念に合わせて白色の服を青色にしているが、古来、朝鮮（韓国）人が白色の服を好んで着用している状況を勘案して打ち出した苦肉策と言える。「白衣民族」という別称を付けられるほど白色の服を好み、白は朝鮮（韓）民族のシンボル（Symbol）なのである。

要するに、裏を返せば朝鮮時代の服色が五行説における色彩概念とは異なっていたことを示す。五行説の概念に合わない日常生活の服色を無理矢理に合わせようとするのが、その事実を間接的に物語っているのである。ちなみに、前近代の日本も五行説の影響は強く受けていたが、朝鮮時代と同じく民衆は白色の衣服を着る傾向が強く、葬式において白い服を着用するのが一般的であった[14]。

このように、前近代における日韓のビジュアルな色彩は、五行説に従いつつも、とりわけ日常生活の服飾は、概ね自然界の色彩とも言える白を用いる傾向が強かったことがわかる。

２．日韓の言葉と日常生活に見る白と黒

（１）前近代

前近代の日韓社会では、多少の例外はあったものの、人間生活の営みの全般に五行説の概念を取り入れていたと言って過言ではない。その中で、日韓の白と黒が言葉、とりわけ諺ではいかに現れているかの視点から分析して行く。

（表２）は日本語と韓国語の諺及び慣用句にみる白と黒を整理したものである。日韓の白に関してみると、共通点が多い。しかし、①は韓国では黄色、逆に⑥は日本では赤として表現される。なお、日本の⑧は韓国の色彩では対応していない。②③⑤～⑪の日本語と韓国語における白は、ほとんどがビジュアルな色彩である。但し、①は何にもなく、⑧は時間がかかるという、比喩的表現である。しかし、①④はビジュアルな白ではなく、観念の色彩である。

次に、（表２）の黒に関する日本の❶❷❼の諺は、韓国では色彩としては表していない。そこで、❶の黒とは生きている意味である。日本人と韓国人の瞳の色は、実際は黒ではなく、褐色である。しかし、瞳の褐色も五行説の五色の範疇に入れて、黒として概念化したことと考える。逆に、韓国の❽～⓫の諺における色彩は、日本と同じ色彩ではない。日韓の❺、韓国の❽❿は観念の色彩を比喩的に表している。韓国の❿は外見から判断するのを戒めることである。なお、⓫は黒で染まりきっている手で、これ以上は染まることのない、つまり変化が起こりえない悪い意味として用いていると考える。

❾の韓国の「近墨者黒」は、日本では「近朱者赤」としているが、両者はともに『墨子』に記している四字熟語である。ことに、韓国では「近墨者黒」の代わりに白と黒を対比させる時調の一節である「까마귀 노는 곳에 백로야 가지 마라（直訳：烏が遊んでいるところに鷺は行くな）」[15] という表現も用いる。

ここで、韓国語では黒、日本語では朱（赤）に関わる熟語を採択している。まず、「近墨者黒」と「近朱者赤」における「者」は白を前提にしている。その理由は、無彩色の白は他の色に染まりやすい特徴があるためである。その意味で、白と黒は対立的な意味の色彩ではなく、「染まると染める」という関係の色彩として用いている。

一方、❾の日韓の諺からは、黒だけではなく日本語の朱も前提の無彩色である白を染めやすい色彩という認識である[16]。五行説の色彩に照らし合わせてみると、日本の白と朱こそ相克の色彩なのである。

ところで、日韓ともに無彩色の白は、他の色に染まりやすいという意味合いが込められている。特に、一般的に前近代における民衆の日常生活の服は概ね無彩色の白であったため、白は汚す、または他の色に染まりやすいイメージ（Image）の色彩として用いると考えられる。

そこで、日韓社会では他の色彩を染める主体の色彩として、それぞれ「朱」と「黒」を用いており、色彩意識の相違の一端がかいま見える。すなわち、韓国では悪役の負のイメー

（表２）日韓の諺及び慣用句における白と黒の色彩

		日本語		韓国語		日本語と韓国語の意味
色彩	番号	事例	出典	事例	出典	
白	①	頭が真っ白		하늘이 노랗다		何にも考えられなくなる
	②	白い歯を見せる		하얀 이빨을 보이다		微笑む
	③	白い目で見る	*137	흰눈으로 보다（눈을 흘기다）	*137	冷淡な悪意のこもった目で人をみる
	④	白眼視する		백안시하다		冷たく扱うこと
	⑤	白髪は冥途の使	*135	가는 세월 오는 백발	*135	白髪が出てくるのは年を取った証拠で、死に一歩近づいたと言う意味
	⑥	隣の花は赤い	*169	남의 밥은 희다	*169	人のものはどれもよく見えて羨ましがる
	⑦	色の白いは七難隠す	*56	살결이 희면 열 허물 가린다	*56	女性の肌が白いことは他の欠点が隠され、美しさが引き立てる
	⑧	烏の頭が白くなる	*94	배꼽에 노송나무 나거든	*94	現実的に起こることがないはずのことや約束のできないこと
	⑨			흰떡에도 고물이 든다	#341	簡単そうなことでも苦労が伴う
	⑩			흰죽에 코	#341	良いものに悪いものが混ざっているが、割り出すことが難しい
	⑪			흰죽 사발 개 핥듯	#341	全てを綺麗に食べてしまうこと
黒	❶	目が黒い内	*242	눈에 흙이 들어 가기 전	*242	元気で色々なことに目が行き届いている間
	❷	黒山の人だかり		人山人海	#260	多数の人が集まっているさま
	❸	どこの烏も黒い	@412			どこへ行ってもそう変わったことはない
	❹	這っても黒豆	@482			極めて頑固な者
	❺	腹が黒い	*197	뱃속이 검다	*197	外見と違って心が陰険なこと
	❻	頭の黒いねずみ	*38	머리 검은 고양이 귀치말라	*38	家のものを盗んだり、害を与える人をたとえる
	❼	緑の黒髪	*232	삼단(麻束) 같은 머리	*232	つやのある健康でふわふわとした髪の毛をたとえる
	❽	すっかり忘れる		까맣게 잊어버리다		記憶から完全に忘れてしまう
	❾	朱に交われば赤くなる（近朱者赤）	@304	近墨者黒	#53	人は交わる友人によって善悪のどちらにも感化される
	❿	人は見かけによらぬもの	*204	까마귀 겉 검다고 속 조차 검을소냐	*204	人間の本心や人柄のよしあしは、外見の印象とは、必ずしも一致するものではない
		人は見かけによらぬもの		까마귀 겉이 검지 속도 검으랴	#13	外見だけで判断してはいけない
	⓫	手癖が悪い	*160	손이 검다	*160	盗む癖がある
白黒	㈠	白黒をつける		흑백을 가리다		正しいか正しくないかをはっきりさせる
	㈡	白を黒と言う	@313	指鹿為馬	#296	人を騙すこと
	㈢			한번 검으면 흴 줄 모른다	#328	悪行に染まったら簡単には正すことができない
	㈣	黒髪が白髪になるまで末長く連れ添う		검은 머리가 파뿌리가 되도록 백년회로하다		黒髪がネギの白根のようになるまでの意
	㈤	目を白黒させる		뜻밖의 사태에 몹시 놀라고 당황하다		思いかけない事態にびっくりする様子
	㈥	白黒を争う		잘 잘못을 다투다		是非をめぐって争う

＊『改訂版日韓類似ことわざ辞典』（白帝社、2007）

@『岩波ことわざ辞典』（岩波書店、2002）

#『ことわざ辞典（속담사전）』（民俗苑、2002、韓国）

・アンダーラインは、白と黒とは異なる色彩か、あるいは色彩ではない諺である

ジとして黒、日本では赤を使っている特徴がある。

しかし、悪役のマイナス（Minus）的イメージとして、日韓は共通の言葉も使っている。つまり、日本語の「墨で塗りつぶす」、同じ意味の韓国語の「먹으로 지우다」における墨の黒は、染める機能を果たす主体の色彩より、消すという悪役のイメージとしても、その役割を果たしている。ちなみに、前近代の日韓の日常生活において黒は、あまり使われておらず、日本の忍者の服装くらいであろう。

日韓の自然界における黒は、珍しい色彩と言えよう。つまり、暗闇、カラス（韓国ではカササギを含む）、スズ、炭、烏石（硯の材料）、黒竹（烏竹）が自然界でみる黒である。この黒は無彩色ではあるが、染まりやすい色ではなく、すでに汚れて染まっている負の考え方が芽生えた可能性は否定できない。

（表２）の白と黒の両方を用いている日本の諺である㊹㊺は、白と黒を対比はさせており、ビジュアルな色彩として捉えている。そこで日本の㊀㊁㊻は、観念の色彩である白と黒であるが、両者は対立する意味はなく、単に対比をさせる意味合いだけが込められている。一方、韓国の場合は㊀㊂が観念の色彩である。ちなみに、日本の伝統的スポーツ（Sports）である相撲の勝ちと負けを示す時に用いる「白星と黒星」という語彙も同じく対比の意味合いの観念の色彩である。他にも白と黒がコントラスト（Contrast）の効果をもたらしているのは、和紙（韓紙）の筆字（墨）、囲碁の石[17]が取り上げられる。

ところで、白と黒に関わる語彙の白髪、白菜、白眉、空白、潔白、明白、敬白、告白、白状、そして黒髪、黒石、漆黒などは、前近代の日韓社会における実際や観念の色彩として用いられていたと考える。前近代に既に存在していた語彙であることを明確にするためには、前近代の文献に記されている語彙を一つ一つ丁寧に拾う必要があるが、これは国語学の研究者に委ねたい。

このように、前近代における日韓の諺、慣用句、語彙、日常生活にみるビジュアル、かつ観念の色彩としての白と黒は、両者の対比はしているものの、対立軸を形成して二分するような意味合いはほとんど認められない。このことは五行説における白と黒が相克ではなく、相生の循環であるという原理にも合致している。

（２）近代国民国家成立以降

現代の日韓社会における白と黒を分析するためには、国民国家成立期の史実を確認する必要があろう。日本はいち早く鎖国から門戸を開き、成功裏に近代国民国家の樹立を収めた。当時、日本に伝わった西洋の文明に対して、従来、日本社会にはなかった新たな文明に関しては、対応する新しい語彙でもって名付けをしたり、日本流の解釈を行ったりした。

近代国民国家成立期以降、日本で作られた白と黒に関わる色彩の新造語の語彙としては、投降時の「白旗」、看護士の「白衣」、「白書」、「黒鉛」、「黒死病」、「白黒映画（黒白映画）」、「蛋白質」、「黒板」などが取り上げられよう。但し、白と黒をめぐる造語の時期が、必ずしも明確ではない語彙もあるということは断っておきたい。

しかし、上記の語彙は、明確に近代国民国家成立後に作られたものと推定して差し支えはない。つまり、とりわけ近代国民国家成立の以前、「黒板」という物品は存在しておらず、看護士の「白衣」も同じ理解で良かろう。これらの語彙は、近代国民国家成立以降に作られた語彙であるが、西洋における概念と観念をそのまま取り入れた造語と言える。日本では白と黒に関わる語彙だけではなく、他にも新造語を作った[18]。

一方、19世紀末、朝鮮から改称した大韓帝国は、自力で近代化にたどり着かず、日本の主導権のもと、引き続き植民地支配期でも日本の影響下で西洋の文物と新造語が韓国に流入された。それ故に、未だに韓国では当時の日本の新造語の影響が尾を引いており、日本とは多くの新造語を共有している。

新造語を創出する際、完全に五行説を無視した訳ではない。例えば、日本では年末恒例の「紅白歌合戦」というテレビ（Television）番組がある。同じく韓国でも年末に「歌謡青白戦」という類似した番組がある。日韓において両者に名付けた色彩に相違はあるものの、五行説の色彩概念が盛り込まれている。（図１）で確認できるように、紅と白、青と白は五行説における相克の色彩、つまり対立の役割を果たしているのである。

今日、日韓の料理においても五行説に基づくビジュアルな色彩が残されており、とりわけ弁当（日本）やキムチ（韓国）で見られる。つまり、前者の弁当には「木（青：青い野菜）」・「火（赤：梅干し）」・「土（黄：卵焼き）」・「金（白：飯）」・「水（黒：黒豆）」、後者は「木（青：ネギ類）」・「火（赤：唐辛子）」・「土（黄：生姜やニンニク）」・「金（白：白菜）」・「水（黒：甘辛の液）」[19]が具現化されている。

ところで、近代国民国家成立期、新文明に対応する形の新造語が量産される中、白と黒に関する西洋的な色彩観念に伴う日韓の「白黒（黒白）理論」という語彙は、非常に強い対立軸を形成させたと考える。

西洋における白と黒は、各々の色彩の意味合いとしての白色は、潔白、無垢、明るい、何にも書いていない経験が乏しい、そして黒色は、高級、真面目、格式、落ち着くといった色彩観念である。しかし、白と黒を対比させると、対立軸を形成する反対の意味合いになる。例えば、警察や司法では色彩として非犯罪者や無罪は白、犯罪者や有罪を黒、そして薬物検査で白は陰性、黒は陽性を意味する観念が、その証左と言えよう。なお、一般的に白は「明るい、善、潔白」、一方の黒は「闇、悪、腐敗」のイメージとして使われる。

このように、白と黒の対比、「白黒理論」という語彙には、白と黒の対立的意味合いが如実に現れている。したがって、現在の生活の中でみる白と黒は対立や反対の概念と観念として使われている傾向が強い。

前述してきたように、前近代における日韓の白と黒は相克ではなく相生だったため、元来、対立軸は形成していない。しかし、新しく作った造語の文明語では、白と黒が対立軸を含むことになり、それによって今の日韓社会における白と黒に関わるのは、対立の色彩観念を生み出している。さらに、囲碁の白い石と黒い石、（表２）㊀の「白黒をつける」＝「흑백을 가리다」など、前近代における白と黒の対比も、今や対立する色彩観念とし

て浸透している。

繰り返しになるが、伝統的に五行説に基づく白に相克（対立）する色彩は、すでに日本の「紅白歌合戦」と韓国の「歌謡青白戦」で見てきた、紅と青である。なお、黒に対する対立の色彩は、青と黄である。日韓の歌合戦における競争や対立の雰囲気を演出する色彩は、西洋からの色彩観念や新造語の概念における白と黒を否定することと言える。とは言え、この事例は稀で、社会全体では西洋からの色彩観念が普遍化している傾向にある。

日韓では日常生活にみるビジュアルなところに、西洋の白と黒の観念を取り入れている。つまり、看護士、医者、薬剤師、研究所の実験担当者、調理師などの白衣、裁判官が黒い法服を着る習慣は、近代国民国家成立後に取り入れられたものである。

言い換えれば、西洋の色彩観念が日韓に伝わって社会に広がりつつ、伝統的な五行説の色彩や、その観念は衰退の道をたどるのである。例えば、日本の伝統的喪服の白色が明治期以降には黒に変わる[20]。一方、韓国の葬式では、西洋から伝わった黒の概念が影響は及ぼしているが、未だにその西洋の概念が完全に定着していない過渡期であると考える。

そこで、日本社会だけが白と黒に拘る語彙もある。例えば、「白色申告」（所得税の申告方法）、「白バイ（Bike）」（白色の警察バイク）、「黒枠」（訃報）、「鯨幕」（葬儀時の白と黒の幕）が取り上げられる。しかし、今のグローバル化時代には、多くの人々が国境を越えて外国との交流を繰り広げ、その中で諸外国の色彩が伝わり、世界に普遍化している傾向もある[21]。ちなみに、日本の暴力団の黒い背広の色彩が韓国の暴力団の衣装に波及しているのは、日韓交流の中で伝わった色彩と見なすことができよう。

近代国民国家成立以降、国家間の交流、さらに今のグローバル化時代は世界の人々が互いの距離を縮め、より親密な交流を行い、色彩に限らず他の様々な文化においても融合が起きている。したがって、伝統的なことを考える際、いつまでが伝統的で、どれが伝統的なものなのか、その区別が容易ではないことに注意を払わないと行けない。

このように、日韓社会の言葉や生活様式における白と黒は、近代国民国家成立以前の五行説に基づく伝統的色彩のベース（Base）に、西洋から伝わった色彩感覚が融合してきている。しかし、現在の日韓社会における日常生活では、西洋から伝わった白と黒の色彩観念が強く影響を与えている。さらに、グローバル化時代の到来によって、日韓社会の色彩は世界の様々な流れを取り入れつつ、複雑に融合している。

３．今日の日韓社会における白と黒の観念と行動

（１）日本社会の色彩観念と行動

一般的に、今日の日本社会で白に対立する色彩としては、紅と青より黒を思い浮かべる。その意味で、前近代における（表２）㈥の「白黒を争う」、そして「白星と黒星」などの言葉は、もはやはっきりさせて、そうか、否かを示す対立的な観念として定着している。山本三千子[22]の五行説における白と黒の意味合いも、今や白は純潔、黒は死や厳粛の色

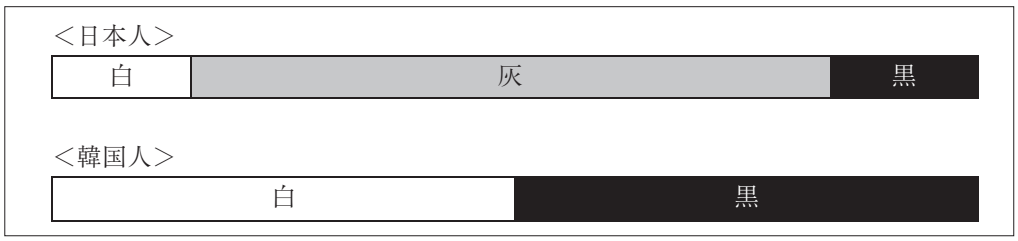
彩観念に変わってきている。

しかし、日本社会に「白黒理論」という語彙は存在しているが、はっきり言わない、つまり観念の白と黒を明確に表さないのが美徳であるという根強い社会の雰囲気である。そこで、白でも黒でもない、白と黒を明確にしない、曖昧な態度は（図２）からすると、白いゾーン（Zone）と黒いゾーンの間に大きなグレーゾーン（Gray Zone）の領域として存在する[23]。このグレーゾーンは、西洋の白と黒に対する対立的な観念に属しない中間の概念である。要するに、西洋の色彩概念に基づく白と黒の対立軸に反する、はっきり態度の表明をしない曖昧なグレーゾーン（灰）が日本人の意識の中に白と黒より広く存在している。つまり、五行説には存在しない色彩の灰、これが日本的意識の特徴なのである。

したがって日本社会では、「はい」（Yes：白）と「いいえ」（No：黒）という答えはしないことが多い。賛否、可否を避け、対話では「そう、そう」、「そうです」、「そうですね」、「なるほど」などの相づちで応酬するケースが多い。「はい」は、ただ「聞いている」という意味合いが強い。

商談の際、商社マン（Man）は相手に「前向きに検討します」とか、「したいと思います」と応対するケース（Case）が多い。もちろん後者は、日常生活の中でもよく使われる言い回しである。これは思っていることなので、「してもしなくても良い」という意味の典型的なグレーゾーンの答えで曖昧さが際立つ。

（図２）日本人と韓国人の白と黒に関する観念的ゾーン（Zone）



さらに、日本語に「玉虫色の答弁」という言葉があるように、見方や立場によっていろいろに解釈できる曖昧な表現である。ある事柄に踏み込めば、白と黒といった自分の意見を明確にしないといけないため、自分と関係の薄いことについては踏み込まない傾向もある。このスタンス（Stance）は、賛否を明らかにして、渦中に巻き込まれる確率も低いため、結果的には批判する人もいなく、世渡り上手に繋がる。この態度は、明確な答えが求められる場合は隔靴掻癢である。

（２）韓国社会の色彩観念と行動

韓国社会は近代国民国家形成期以来、日本の影響を強く受けているため、白と黒が対立軸を形成する概念であるのは日本とほぼ同じ傾向にある。しかし、日本とは異なり、白と黒の対立観念が強く、はっきりさせ過ぎたあまり、白または黒という両分法しか存在しな

い社会雰囲気である。そこで、はっきりせず、どちらともとれる曖昧な態度をとると、批判される。つまり、「白黒理論」が強く根付いている社会である。したがって、表現や行動、観念にグレーゾーンは、ほとんど有していない。（図２）で見るように、白と黒以外の色彩観念は存在しないため、妥協するのが難しい。現在の韓国政治、社会で不協和音が多く、激しい対立があるのはそこに理由があると考える。

前近代から韓国社会では、水墨画というジャンル（Genre）の絵が存在している。この絵画は、色彩を引き出す絵具として墨だけを使い、水の加減で濃淡を表し、遠近や立体感などを引き出す。墨に水加減が多くなると、灰色が演出できるが、五行説の色彩に灰色は見あたらない。実際、灰色が存在はしているものの、前近代から韓国人の意識の中に灰色は取り入れてこなかったのである。

韓国のマスコミは、国会議員が物理的行動に出た[24]、過激な言動をした[25]、国会内の器物を壊した[26]、断食をして見せている[27]、ある事柄を認めさせるため居座りをしている[28]ことなどを報じている。これは白と黒の対立観念のもと妥協、すなわち白と黒以外の色彩を認めない結果と言える。政治家だけではなく、一般人も同じ行動や意識を見せている。例えば、2014年4月16日、済州島へ修学旅行に行く多くの高校生を乗せた「世越号」という船が、途中の全羅南道珍島の海上で沈没した事故後、子供を亡くした親が断食をしている。その断食の理由は、事故に関する特別法の制定を要求する自分の案（白）以外のこと（黒）は認めないという姿勢である[29]。

裏を返せば、韓国は観念の白と黒をはっきりさせる爽快な社会ではあるが、激しい対立や不協和音が多い社会でもある。態度を留保したり、どちらともとれる答えは批判される。例えば、日本人の「前向きに検討します」という答弁は、韓国人は肯定ととらえることが多く、後日、否定の返事が返ってくると、「桜」と批判する[30]。ここでの「桜」とは態度を変える信用できない人という意味合いである。

妥協がなく、はっきりさせる社会においては、逆にはっきりした（白）事柄や発言については責任をとらないといけない。しかし、今の韓国社会では自分の言動について責任は取ろうとしない（黒）傾向が強い。例えば、ネット（Net）上で発信する意見に対し、発信者の匿名を認める世論が強かったため、発信者がネット上でデマ（Demagogue）を流したり中傷誹謗をしたりしても取り締まることは難しい現状である。言い換えれば、自分の意見ははっきり述べる（白）のに対して、意見に対する責任は負わない（黒）ということである。

このように、日韓社会は西洋の色彩概念を取り入れ、とりわけ白と黒は対立観念を生み出す色彩として定着した。つまり、前近代の五行説では相生の色彩の白と黒が相克に等しい観念に変わったのである。しかし、日本社会では観念の白と黒の対立軸は弱い。一方、韓国は観念の白と黒の色彩を明確にする雰囲気が強い社会である。ちなみに、白と黒の観点に基づいて考察してきた日韓社会における行動や意識は、あくまでも両社会における概ねの傾向であることを断っておきたい。

おわりに

前近代の五行説における白と黒は、金と木で相克ではなく、相生である。前近代の日韓社会では、白と黒に関する五行説の色彩概念を取り入れながらも、その概念に反する独自の色彩も取り入れていた。五行説に関する白と黒は相生の関係であるため、前近代における諺や慣用句、そして日常生活に見る白と黒は対立ではなく、対比させるような観念であると考える。

しかし、近代国民国家成立期以降、西洋の白と黒に関する概念や観念が導入され、さらに西洋の新文明に対応する新造語も作られ、前近代の五行説における白と黒の色彩観念は変化した。そこから、現在の日韓社会における白と黒は対立軸を形成する色彩として定着する。「白黒理論」という語彙は、代表的に白と黒の対立軸を表している。要するに、西洋文明の影響のもと、白と黒は相生から対立へと大転換を成し遂げた。一方、伝統的な五行説の色彩観念は、日韓社会で衰退していく。

ところで、白と黒の色彩観念でもって日韓社会を分析すると、次のようになる。日本社会では、白と黒をはっきりせず、対立軸をあらわにしない反面、韓国社会でははっきりしすぎて激しい対立を生むことになっている。すなわち、日本ではある事柄について、観念の白と黒を明確にせず、曖昧にするグレーゾーンという意識を持っているため、激しい対立のない滑らかで穏やかな社会である。

しかし、韓国社会では白と黒をはっきりし過ぎていることもあり、激しく対立する雰囲気を作り出して、妥協のない行動をとる。つまり、社会の雰囲気や観念として白と黒の領域しか存在していない、「白黒理論」の構図である。

要するに、日韓社会は近代国民国家成立以降、白と黒に関する同じ概念や観念を導入して持ちつつも、行動と観念としては異なる社会文化を露呈している。そこで、日韓社会の根底には、それぞれ異なる色彩観念を持っているということを理解するのは、グローバル化時代をともに歩んでいく上で重要なポイント（Point）になると考える。

注

（1）日韓の白と黒に関する比較ないし対照の研究はないが、日本の研究の中で中野博雄「色彩語の意味分析」（『桐生大学紀要』第22号、桐生大学、2011年）は、日本語、英語、フランス語の色彩語の比較分析、そして鈴木伸子「生活文化としての赤、白、黒」（『家庭科教育』77（10）、家庭科教育社、2003年）は日常生活における赤、白、黒の配色や使用例の分析を行っている。一方、韓国では五行説の色彩と服飾に関わる研究が多い。例えば、강윤숙（カンユンシュク）・이순홍（イシュンホン）「服飾의 象徴的 意味에 관한 研究―陰陽 五行思想을 基礎로―（服飾の象徴的意味に関する研究―陰陽五行思想を基礎として―）」（『服飾』No.30、韓国服飾学会、1996年、韓国）、김용채（キムヨンチェ）「朝鮮朝의 色彩禁制와 그 底辺（朝鮮朝の色彩禁制とその底辺）」（『朝大美術』No.3、朝鮮大学校美術大学、1981年、韓国）が取り上げられる。

（2）水口幹記「古代日本と陰陽五行説」、野崎充彦「朝鮮文化と陰陽五行」（『月刊しにか』12月号、大修館書店、1999年）

（３）影山輝國「陰陽五行説とは何か」（『月刊しにか』12月号、大修館書店、1999年）
（４）相生に関しては、古藤友子「陰陽五行説の展開」（『月刊しにか』12月号、大修館書店、1999年）、そして李基東訳解『周易講説上』（成均館大出版部、1997年、韓国）25頁を参照されたい。
（５）「行列字」に関しては、『韓国百科』第二版（大修館書店、2002年）90頁を参照されたい。
（６）高句麗の古墳壁画に描かれているのは五獣の中で、「青竜図」、「白虎図」、「朱雀図」、「玄武図」の四神図であり、「遼東城塚」、「鎧馬塚」、「江西大墓」、「江西中墓」などで散見される。さらに、百済の古墳の「宋山里古墳」、「陵山里古墳」にも四神図が見られる。
（７）奈良県高市郡明日香村の「高松古墳」、そして「キトラ古墳」に四神図が確認される。
（８）山本三千子『還暦に赤いちゃんちゃんこはなぜ？』（講談社＋α新書、2008年）30～34頁。김금주（キムグムジュ）・김재웅（キムジェウン）「五色의 意味에 관한 小考（五色の意味に関する小考）」（『論文集』Vol.5、公州映像情報大学、1998年、韓国）346～348頁でも、白と黒に関しては前掲山本とほぼ同じ見解を示している。つまり、白は「死」、黒は「混沌、創造、再生」を象徴するとしている。
（９）박명원（パクミョンウォン）「한국인의 색채의식 연구―전통색채를 중심으로―（韓国人の色彩意識の研究―伝統色彩を中心に―）」『東洋芸術』４号、韓国東洋芸術学会、2001年、韓国）
（10）歴史を遡ると、すでに高麗時代の忠烈王元（1275）年に白衣の禁制を出していた。
（11）『朝鮮王朝実録』（太宗実録、巻１、元年５月条）
（12）朝鮮時代の世宗７（1425）年11月、燕山君11（1505）年、粛宗２（1676）年と同11（1685）年、英祖14（1738）年にも禁制令が出ていた。
（13）『朝鮮王朝実録』（正祖実録、巻38、17年11月条）
（14）増田美子編『日本衣服史』（吉川弘文館、2010年）327～330頁を参照されたい。
（15）この下りは、『青丘永言』と『歌曲源流』に採録されている時調の一節で作者は不明である。
（16）朱（赤）に関しては、前掲山本『還暦に赤いちゃんちゃんこはなぜ？』26～28頁を参照されたい。
（17）正倉院宝物の中では囲碁盤と石が伝わっているが、聖武天皇の遺品の一つとして「国家珍宝帳」に記されている「木画紫檀碁局」は朝鮮半島のマツの木で作られている。谷岡一郎『囲碁十九路盤の起源―創生と伝播に関する「統合［元嘉暦］仮説」―』（大阪商業大学アミューズメント産業研究所、2013年）の2～3頁によれば、「木画紫檀碁局」は百済の義慈王（在位641～660年）がもたらしたものとしている。裏を返せば、囲碁は古代から日韓における共通のものであると言える。
（18）厳密に言えば、近代国民国家成立期以前、つまりザビエルの来日以降、伝わったキリスト教（カトリック）に関する諸用語、そしてオランダとの貿易に伴って発生した蘭学による新造語が作られた。しかし、新造語が本格的に量産されたのは、近代国民国家成立期である。白と黒だけの語彙ではないが、この時期の『改訂増補 哲学字彙』（東洋館、1884年）に載っているような和製漢語が数多く作られた。
（19）朝倉敏夫・蔡淑美『キムチへの旅―作って・食べて・知る―（NHK 趣味悠々）』（日本放送出版協会、2003年11月）で、キムチの色彩が五行説に基づいているとの解説をしている。
（20）前掲増田『日本衣服史』327～330頁。
（21）グローバル化時代より遙か以前から世界的に標準化している色彩がある。例えば、交通信号機の色彩は交通秩序の維持に欠かせないため、世界で標準化されているのである。
（22）前掲山本『還暦に赤いちゃんちゃんこはなぜ？』30～34頁。
（23）拙稿「한일 현지 비지니스 관행 및 상관습의 차이－상거래와 상담（商談）을 중 심으로－（韓日における当地のビジネス慣行及び商取り引きの習慣の差―商取引と商談を中心に―）」KOTRA 海外ビジネス情報ポータル（global window）海外市場情報（日本）9431、http://www.globalwindow.org/
（24）『朝鮮日報』（朝鮮日報社、2013年11月18日、韓国）
（25）『朝鮮日報』（朝鮮日報社、2014年4月2日、韓国）
（26）『朝鮮日報』（朝鮮日報社、2010年9月30日、韓国）
（27）『朝鮮日報』（朝鮮日報社、2014年8月24日、韓国）
（28）『朝鮮日報 프리미엄（プレミアム）』（朝鮮日報社、2013年11月27日、韓国）
（29）「一問一答」（『朝鮮日報』朝鮮日報社、2014年8月18日、韓国）で、断食をしてきたＫさんは健康

の悪化で、一旦、断食を中断したと報じている。

(30) 前掲拙稿「한일 현지 비지니스 관행 및 상관습의 차이－상거래와 상담（商談）을 중심으로－（韓日における当地のビジネス慣行及び商取り引きの習慣の差―商取引と商談を中心に―）」

Black and White Colors in Japanese and Korean Societies: Focusing on the Language and the Concept

Kim Tae Ho

Abstract

In this paper, I will explore the state of Japanese and Korean society by examining how the colors black and white are interpreted through the analysis of the pre-modern Gogyo Theory（五行説）and the Western color concept, which was acquired after the modern nation-state age.

Black and white in the pre-modern Gogyo Theory are represented as “Moku（木 : tree)” and “Kin（金 : gold）” respectively, both of which exist not in conflict with one another, but in synergism. Both Japan and Korea first adopted this Gogyo Theory color concept of black and white, but later each developed their own original color concept that contradicted its predecessor. Hence, it can be assumed that the initial color concepts seen in proverbs and throughout the pre-modern period viewed the colors black and white as points of comparison rather than confrontations.

When Western ideas were introduced in the modern age, neologisms corresponding to the new Western color concept appeared, and the Gogyo Theory’s color concept for black and white was altered. From then on, black and white seen in present Korea and Japan were anchored as colors that formed the confrontation axis. The “Monochrome Theory” typically represents this axis. In short, the synergism of black and white polarized into confronting colors and the traditional color concepts of the Gogyo Theory began to decline.

Analyzing Japanese and Korean black-white concepts reveal Japanese society to be non-confrontational on the one hand and Korean society to be confrontational on the other. That is to say, Japanese society avoids clear confrontational situations or making black and white statements while Korean society prefers a clear-cut, black and white evaluation of a situation, although it may result in fierce conflicts. Japanese society is a peaceful and calm society where matters are often left in the gray zone without facing intense confrontation while Korean society tends to prefer the black and white extremities, often creating an atmosphere of intense conflicts. In other words, Korean society represents the “Monochrome theory,” where only black and white exist as the societal atmosphere.

After the establishment of modern nation-states, Japan and Korea revealed separate societal notions and behaviors related to the colors black and white,

despite originally sharing the same concepts of the two colors. To work together in this age of globalization, one must recognize that these two cultures hold a different understanding of these two colors.